

再生医療等の内容をできる限り平易な表現をもちいて記載したもの

尿道狭窄症は様々な原因によって尿道内腔が狭くなり、排尿しにくくなる疾患で、男性に多く見られます。具体的には前立腺肥大症や膀胱がんに対する内視鏡手術による後遺症、交通事故や労働作業中の事故の外傷、先天的な尿道の疾患である尿道下裂などが原因となり、尿道粘膜に傷がついて、その傷が修復される過程で尿道粘膜や尿道周囲の尿道海綿体に癒痕化が起こり、尿道が狭くなる疾患です。尿道狭窄症には、口腔粘膜組織を狭くなった尿道に移植して根本的に尿道をつくりなおす手術（尿道形成術）が最も有効ですが、専門的な技術が必要で対応可能な医師が極めて少なく、長期の入院が必要であることや、侵襲性が高いことが問題です。そのため、簡便かつ低侵襲に行える経尿道的治療（内尿道切開術や尿道ブジー）が広く普及しています。しかし、経尿道的治療は成功率が低く、再狭窄しやすいことが問題視されています。本治療は、少量の口腔粘膜から口腔粘膜上皮細胞を培養し、内尿道切開術後に尿道内へ投与することで、低侵襲に口腔粘膜の移植を試みる画期的な方法です。

